



# 東京日々新聞

九百卅四号



情と生し  
情凝り煩  
惚と生え  
煩惱あり思  
と生下是とあつけし其想と  
の妄想の中へ色情と生れ  
此色情は四つあり互に思ひ  
慕ひて天よあらば比翼の  
鳥地より有らば連理の枝と  
云宗真似と真情と言ひ去日  
の情人は良時の快其日の風次第  
は是を所消薄情とて不存る人なり 黄金とあはれと枕の下へかみ手又握  
て掛ると慾情とす痴情は是と事かろ 先考で何ぞ思ひぬを自分かてて其意の淵行徳

船の乗りある早川伊太良と呼ぶ男あり 新芝原籠を奇屋の娼妓とて言ふ言ふも別添て百夜は  
愚千夜うけて通へど先考の空吹く間本年二月と旬と例の如く遊妻は来り如何なる事かあり  
けるも長別とて疵と負せ 其身も自散るるは是又痴情とせし事記將外子  
子細ありたるるを記考も知らん 唯世の好男子の爲に誌して後世の  
戒と備へ  
待乳山麓

温克堂龍吟誌

萬齋 芳幾 引

人形具足屋

